

狂信

狂信

高木俊朗

朝日新聞社

高木俊朗 (たかぎ としろう)

明治41年東京生れ。早稲田大学政治経済学部卒。
元日本映画社監督。陸軍報道班員として昭和14年
から20年まで、中国、マラヤ、インドネシア、タ
イ、仏印、ビルマなどに従軍。昭和27年にブラジ
ルを旅行。

著書 「インパール」「遺族」「知覧」(朝日新聞社
刊)「抗命」「戦死」(朝日新聞社刊)「全滅」
改訂版「インパール」「憤死」「神風特攻隊の出撃」

住所 神奈川県逗子市桜山 6-9-24

狂

信

定価

五八〇円

発行日

昭和四五年八月一二日第一刷
昭和四五年九月二五日第二刷

著者

高木俊朗

発行者

朝日新聞社

大田信男

印刷所

凸版印刷株式会社

発行所

東京・名古屋
大阪・北九州

朝日新聞社

狂

信

目

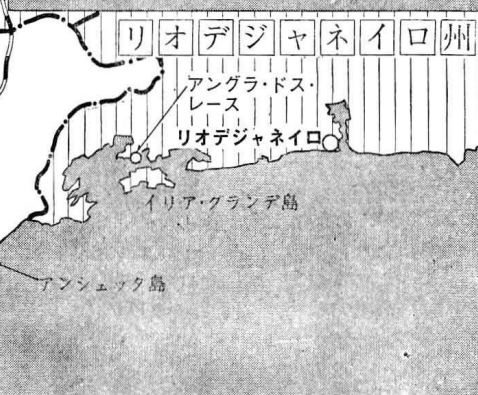
次

警	襲	暗	怪	踏	監	詔	特	事
告	撃	殺	文	絵	視	勅	務	件
		の	書	の	の	は	機	簿
		朝		拷	目	偽	関	
				問		物		
7	20	39	70	108	154	202	219	260

華麗な赤の広間	298
危険な日本人	314
変容する犯罪	335
臣道連盟本部	371
決闘	395
欺かれた努力	435
あとがき	453

カバー写真撮影 飯山達雄
 題 字 竹中誠子
 地図作成 吉沢家久

サンパウロ州略図



大 西 洋



警告

一

私は、非常に危険な立場にあることを知った。私の最初の訪問客が、その奇怪な話をもってきた。私がブラジルのサンパウロ市についた、その翌朝のことであった。

小肥りの男だった。背が低いのに、肩をいからすようにして、私の部屋にはいつてきた。小さな口ひげをつけて、くせのある目つきをしていた。名刺には『サンパウロ・マガジン代表 千葉武男』としてあった。

千葉は赤い箱のたばこをさしだして、すすめた。

「こっちでは、売れているたばこですよ」

千葉は、せかせかした調子で、たばこをすいながらいった。

「あんた、気をつけないと、あぶないですよ」

私がブラジルに行ったのは、映画製作の仕事のためであった。昭和二十七年三月のことであった。日本では、十勝沖地震や、日航機の三原山衝突などの事件の起ったころであった。

千葉の話では、その映画製作はむずかしいだろう、というのだ。第一には、その資本金が集っていない。第二には、その会社の社長や製作者がいかがわしい人物だ、というのだ。

社長というのは、土地会社を営んでいる宮村季光^{みやむらすみつ}であった。製作者は沢井天城^{さわいてんじょう}という田舎まわりの興行者で、自分で映画の弁士をしていた。このふたりが移民史映画の製作を企画して、トーキプラスという会社を作った。しかし、これは事務所だけの映画会社であった。撮影所や機械は、ブラジル人の映画会社から借りることになっていた。そして、監督、脚本、俳優などを、日本から呼んだ。

千葉の話では、トーキプラスの資本金五千コントスは、全然払込まれていない、という。コントというのは、ブラジルの通貨の単位で、当時、一コントは日本金の一万円に相当していた。

宮村は、出資するはずの五千コントスができなくなった。それは宮村の土地会社の不正を暴露されて、訴訟騒ぎになっているためである。

宮村は奥地のパラナ州のアブカラナ市で、宮村植民土地会社を営んでいた。昨年から、北パラナの土地を「ドロード植民地」と名づけて売出した。宮村は、ここに新天地を建設するとふれこんで、大がかりな宣伝をつづけていた。

ところが、これに不正がある、と、新聞に暴露された。それによれば、宮村は州政府からドロー



サンパウロ市街

ドの土地の払下げの権利を得たといっているが、州政府は否定している、という。つまり、宮村は、自分に権利も資格もない土地を売出したのだから、全くの詐欺であるわけだ。そればかりでない。宮村は大きな土地や財産をもっていると称しているが、実際に登録してある所有地は、わずかに一ロツテ、価格にして八十コントスにすぎない。

私は、このような話をする千葉の真意をつかみかねていた。早口にしゃべるその唇には、切傷のあとがあった。私は、この男が『サンパウロ・マガジン』という雑誌を持歩いて、金をかせいでいるとしたら、うかつなことはいえないと思った。

恐らく、沢井天城のところに行って、私のいったことを、そのまま話すに違いなかった。

しかし、千葉の話は重大であった。資金がなければ、映画の製作はできない。私といっしょに、監督の小杉勇や俳優団は、もうサンパウロ市に到着している。ここ

で、相手が幽霊会社ということになったら、大変な問題になる。

「宮村が金をだせない時には、沢井天城がだしませんか」

千葉はすこし斜視の目をけわしくさせて、

「沢井は金なんかありませんよ。宮村にうまいことをいって、金をださせることにしたただけだ。製作費どころか、生活費もらくじやないでしょう」

「日本に沢井の使いできた男の話では、いままでも、映画の製作をしていたような」

「うそっぱちさ。芳木ですか、そんなことをいったのは」

今度の企画をもって交渉にきた芳木の話、小杉監督や俳優たちは疑わなかった。しかし、私は芳木の話しぶりから、信用できないものを感じていた。それだけに、いま、千葉の話を聞いても、あわてることにはなかった。

「沢井は何をしているんですか」

「いまはハミリのカメラを持って、奥地の成功者のファゼンダ（農園）などを撮影しているらしいな。前には、映画の弁士をやっておった。ブラジルにくる前は、浪花節語りで、中国やマレーを巡業して、北米にわたったといっていましたよ。それから、曲馬団をもってハワイに行つて、ひどい困難をくつて、ブラジルに逃げてきたらしい」

私は沢井の前歴を聞いて、不安を感じた。これでは、たとえ宮村の資金ができたにしても、沢井と仕事するのは危険なように思われた。

私は早急に、宮村や沢井の実情を調べようと思った。宮村の不正を暴露したのは、日本語新聞の南米時事であった。そこに行つて、暴露記事を読むのが、何よりの早道であった。

私はバロン・デ・デュブラット通りの南米時事に行った。メルカードと呼んでいる市営の食品市場の近くで、ごみごみしたところであった。

新聞社は小さな二階建てであった。せまい、きたない部屋には、四、五人の日本人がいるだけであつた。私は編集長の山路舜一に会つて、宮村の会社のことをたずねた。記事を書いたのは、山路であつた。バラナ州の現地には、二、三日前にも取材に行つて帰つてきたところだつた。

「宮村というのは、どういう男ですか」

「とんだ食わせ者ですよ」

山路は率直にいった。

「ブラジルでは、土地売りをやっているのは、ほらふきの悪いやつが多いんです。宮村は、すこし前までは、偽の歯医者をしていたんです。資格も、登録もないんです。二カ月ばかり、見習いをやっただけです。それを、サントス市随一の歯科医で、技工師を三十名も使っていた、と自称していたんです。その上、治療代が途方もなく高くて『払えないから待ってくれ』というと、畑のものをだせ、米をだせと取立てる。そのうち、宮村の治療した歯がうんできて、問題になった。これで、免許状をもっていないことがばれると、すぐに治療の機械をかくしてしまつたのです」

このような偽者が横行するのも、ブラジルという広大な植民地の、未開の一面をあらわしている

ようであった。山路は語りつづけた。

「パラナへ行くと、宮村のいろんな話があるんですよ。齒医者の前には、自分の父は日本の外交官の宮村大使だといって、ブラジル人を信用させていたっていいですよ」

私は暗い気持ちになった。このような男とは、いっしょに仕事することはできない、と思った。山路の用意してくれた新聞のとじこみを開くと、『疑惑深まる、宮村植民土地会社』という大きな見出しが目についた。

それは昭和二十七年二月八日の記事であり、そのあと、三度にわたって続報があった。

さらに私をおどろかせたのは、最近の二十五日の記事であった。その見出しには『宮村植民土地会社は、存在しない幽霊組織』としてあった。

山路がパラナ州政府の登録を調べてみると、宮村季光の名はあっても、会社の名は見当らなかった。会社が登記されていないのでは、州の土地の払下げをうけられるはずがなかった。

宮村は、この記事に対し、取消しを要求し、南米時事に対し、暴力団まがいの脅迫をしているということであった。

山路は、古風な八字ひげをつけていた。年は、まだ若いようであった。

山路は私に注意をした。

「われわれは、あなたがたをお気の毒に思っているんです。ひと筋なわではいかないやつだから、気をつけたほうがいいですよ。それにしても、こっちへきてしまったのは、まずかったですな。日

本で、出発前にわからなかったのですか」

私は沢井の代理として交渉にきた芳木のことを話した。芳木は、こうした事情を知らないはずはないと思われた。山路は、

「芳木なんかだめですよ。沢井と、一つ穴のむじなですよ」

と、不快そうな顔をした。私は出発前に、芳木を信用できないので、別の方法で調べようとした。そのために、つてを求めて、ブラジルにいる日本ボーイスカウト連盟の財務委員の島田利次に依頼した。ところが、返事がこなかった。そのことを山路にいうと、

「それでわかりました。その男は、あなたの手紙をもち歩いて、映画の仕事もするようなことをしています。あの男の名刺には、朝日新聞社会部長としてありました。われわれは相手にしません。が、このごろ、日本からくるのも、おさい銭かせぎの変なのが多いです。日本ボーイスカウト連盟までが、ああいう男をよこして、寄付を集めているんです。こじき根性ですな」

私は、思わぬ手違いになっているのを知り、自分の安易なやり方を後悔した。山路は、

「こんなことになるだろうと思っていました。私は同情していますから、あなたがたのことを書かないようにしています。しかし、こっちの新聞には、あなたがたにそっぽをむいているのがあるから、注意してくださいよ」

「どうして、そっぽをむくんですか」

山路は答えないで、別のことをいいだした。

「あなたがたは、どうして時報の黒石の家にいるんですか」

われわれはサンパウロ市につくと、ブラジル時報という日本語新聞の社長、黒石清作の家につれて行かれた。そこが、当分の宿舎だというのだ。私は沢井天城に、約束と違うことをただした。芳木の話では、サンパウロ市一流のホテルにとめるということになっていたのだ。

沢井天城は、のどのつぶれた浪花節声で、

「ホテルは、言葉が通じないと、ご不自由と思ひまして、黒石さんをお願いいたしましたです」と、妙にいんぎんに答えた。

山路は、この話を聞いて、笑いを浮べた。

「みんな、はじめからの筋書ですな。宮村と沢井、沢井と黒石、みんな同類ですよ。それにしても、黒石の家にいるのはまずいな。その上、あなたがたのシネマは、時報が後援しているしね」

私は山路の言葉に、重大な警告と、好意のこもっているのを感じた。私は、この危険な事態に、早く対策をたてねばならないと思った。

二

私は小杉監督に宮村や沢井のことを話して、対策を促した。

もともと、沢井が小杉監督を呼ぶことにしたのは、ふたりが宮城県出身という、同県のみしみとただであった。それだけに、この製作を中止することは、たやすかった。しかし、すでに契約